

## I . 2013 年度FD活動の総括

人文学部のFD活動が本格的に始まったのが2003年、それからほぼ10年を経て、FD委員会の構成が一新されることとなった。これまでは各カリキュラム単位から1名の委員が出ていたところを、学部全体から3名、教務担当の学部長補佐を加えて4名の体制となったのである。このスリム化、「発展的」と言えばしばしば事業の後退であることが多いけれども、今年度のFD委員会に限っては、縮小どころか、これまで手を付けていない企画に取りかかることになった。学部から申請した三重大学教育GP「カリキュラムポリシーの策定と連動した授業の目的・方法の明確化」に協力するため、少人数教育に関するアンケートを実施することになったのである。人文学部における少人数教育の意義・成果を確認し、さまざまな事例を収集するためには、どうすればよいか。FD委員会では、学生・教員の双方からアンケートをとることが適切と判断し、年度当初より実施のスケジュール、アンケートの設問項目、回収方法等を検討した。その結果、教員については2013年10月に所属の全教員対象に「少人数教育に関する教員アンケート」を、また学生については11月に、卒業予定の全学生対象に「少人数教育に関する学生アンケート」を実施することができた。大学で少人数教育を行うということは、ほとんど自明と思われるかもしれないが、昨今の大学をめぐる情勢、とりわけ人文系学部の存在意義を問われる状況もある。また、そのような外部的な要因は別にしても、私たちが、日々当たり前のように行っている演習の授業、卒論指導、ゼミでのディスカッションなどについて、教員自身が改めて振り返る機会を得たことは決して無意味ではないと思う。その詳細については、第IV章をご覧頂きたい。

少人数教育以外についても、従来行ってきたFD活動を今年度も継続した。6月研修会は恒例の前年度授業アンケートに基づく分析、7月研修会はミッションの再定義を背景に、大学院のDP・CPと域学・産学連携について、そして9月には、2006年にも来て頂いた鈴木英一郎先生に「学生対応の留意点」と題して講演をして頂いた。前期・後期の学生による授業アンケート、年度末の大学院アンケート、そして教員による授業アンケートも、おおむね従来と同じように実施している。

委員一人一人が、前年度までのFD委員の倍以上の働きをと、覚悟し、奮闘してきた委員会ではあるけれども、取り組めなかった問題、積み残した課題も、もちろんある。その最たるものが、授業アンケートの実施方法、紙媒体からWebへの移行の可否については、十分議論することができなかつた。Web化による回収率低下への懸念はもっともだが、一方で、「環境」を看板に掲げる大学への責務もある。いずれをとるべきか、検討を次年度のFD委員会に託したい。

より根本的な問題としては、FDというものは、それに力を注げば注ぐほど、その分、自らの研究に割く時間は少なくなる。大学における教育の、少なくともその一部は研究によって裏打ちされるものであるとするなら、教育をよくしようとするFD活動はどうしても、そこに何がしかの矛盾、ジレンマを孕まざるを得ない。そのようなジレンマは、多かれ少なかれ、学部の構成員全員が感じていることなのだろう。そのことを頭の片隅に置きつつ、今年度のFD委員会は、上記少人数教育に関するアンケートを初めとして、活動の成果が、できる限り実質的に役立つものになるよう、努力し、工夫をした。第VIII章にFD活動への要

## I. 2013年度FD活動の総括

---

望が列挙されているが、そのうちのいくつかには、既にこの報告書が答えになっている。本報告書を読まれる方は、従来の定型的な、あえて言えばもっともらしい文言が減って、かわりに、学生の生の声、教員が直接書いた言葉が増えたことに気づかれるだろう。それらが、今後の教育改善のために、少しでも役立つことを願っている。

委員の数が半分以下になっても、委員長が無能なお飾りであっても、FD委員会としての責任を果たすためには、学部長のご指導と、教務委員長のアドバイスが欠かせなかった。何より、初めての試みである少人数教育に関するアンケートのデータ分析と、例年処理に最も手間がかかる、授業アンケートの分析について、法律経済学科の委員には獅子奮迅の働きをして頂いたこと、ここに記して感謝したい。

2013年度FD委員会委員長 野田 明